

論文の内容の要旨

論文題目 集団における幼児の性自認形成過程についての実証研究
——幼稚園3歳児クラスの観察から——

氏名 大滝 世津子

本研究は、幼稚園入園時には性自認もしていなかった幼児たちが、やがて「男女間の上下関係」を提示するようになるまでのメカニズムを明らかにすることを目的とした。具体的には、幼稚園3歳児クラスにおける幼児の性自認メカニズムと「男女間の上下関係形成過程」についてそれぞれ明らかにした。その上で、両者の関係を分析することで本研究の目的を明らかにした。なお、本研究における「性自認」とは「保育者が幼児に対して『オンナノコ/オトコノココっちに来て』と呼びかけたとき(=性別カテゴリー名を呼びかけたとき)に性別カテゴリーに沿った形で保育者のところへ行ったこと」をもって成立したと理解した。また、「男女間の上下関係形成過程」とは、自分の性自認もしていない幼児たちの集団であった幼稚園3歳児クラスにおいて、幼児たち自身によって「上下関係を含む男女間の差異」が提示されるようになるまでの過程のことであり、「男女間の差異」とは①「男女で対になってはいるが、同じものではないこと」、②「男女で異なる選択・行動をせまられること」と定義した。

従来性自認は主に心理学の分野で研究が蓄積されてきた。これらの特徴は①家庭内における大人—子どもという垂直軸を基本としており、子ども同士のピアという水平軸が含まれていないもの、②家庭外における両親以外の大人や仲間が幼児の性自認に影響を与える要因となりうることを指摘してはいるが、実際の幼稚園のような日常的・継続的に関係が保たれるような組織的集団の中で生じた集団力学(継続的な人間関係や力関係など)の影響等については説明していないもの、に分類された。これに対し本研究は、垂直軸と水平軸とが相互行為場面における指導や活動を通して、幼稚園の構造的な特徴と交差するところから出てくる集団的現象として性自認を扱った。

集団力学に焦点を当てた研究（集団における相互行為的な視点を導入）を行うことが本研究の一つの特徴となっている。

以上の点を踏まえ、本研究では、神奈川県Q幼稚園で、3歳児クラス（R組・K組）に属する幼児（女児14名、男児17名）、担任を対象とし、各幼児の性自認時期を測定するための実験および幼児の相互行為場面をとらえるための観察を行った。

その結果以下のことが明らかになった。**第1章**では、先行研究の検討を通して、本研究における「性自認」「男女間の上下関係形成過程」および「男女間の差異」という概念の定義を明確にした。続く**第2章**では、各幼児の性自認時期を明らかにした。これにより、以下の点が明らかになった。第一に、幼稚園3歳児クラスの大半の幼児は入園時には性自認をしていなかった。第二に3歳児クラス全体で見ると、数名ずつがほぼ同時期に性自認し、そのかたまりが4～5期に分かれて発生していた。

そして**第3章**では、性自認時期に影響を及ぼしている要因を明らかにし、それをもとに幼児のタイプ分類を行った。これにより、幼児は「集団・同調タイプ」「集団・反抗タイプ」「中間（集）・同調タイプ」「中間（集）・反抗タイプ」「中間（個）・同調タイプ」「中間（個）・べったりタイプ」「中間（個）・反抗タイプ」「中間（個）・没交渉タイプ」「個人・同調タイプ」「個人・べったりタイプ」「個人・反抗タイプ」「個人・没交渉タイプ」の12タイプに分類された。

第4章では、性自認時期と「幼児と保育者の相互行為」の関係を明らかにした。これにより「幼児と保育者の相互行為」に限定したときに考えられる性自認のメカニズムは、以下の4つに整理された。すなわち、1)「性別カテゴリーとの同一化」による性自認、2)「性別記号」との同一化による性自認、3)性自認するための回路がほぼ出来上がっていた状態で行われた「訓練」によって回路がつながったことによる性自認、4)性自認の「ヒント」となるワードの出現頻度が増加したことによる性自認、であった。

第5章では、性自認時期と「幼児同士の相互行為」の関係を明らかにした。これにより、「幼児と保育者の相互行為」に限定したときに考えられる性自認のメカニズムは、以下の2つに整理された。すなわち、1)「同性集団との同一化」による性自認、2)「異性集団との相互補完的同一化」による性自認、であった。

第6章では「性自認のゆらぎ」が見られる幼児の事例を分析した。これにより、第4章および5章で明らかにされた性自認メカニズムの他に、「異性集団との同一化」という性自認メカニズムが存在することが明らかになった。

第7章では、以上の章の知見を統合することにより、幼稚園3歳児クラスにおいて、どのようなタイプの幼児がいつどのようなメカニズムで「性自認」したのか、を明らかにし、モデルを作成した。これによると、幼稚園入園時には家庭における「同性の親・兄弟との同一化」「異性の親・兄弟との相互補完的同一化」によりすでに性自認している幼児がクラス内に数名存在していた。それは主に「集団・同調タイプ」の幼児であった。やがてこれらの幼児を中心として「男女混合集団」、「女児集団」あるいは「男児集団」が形成されるが、それより前に性自認した子は保育者による「訓練」などによって「性別カテゴリーとの同一化」あるいは「性別記号との同一

化」によって性自認した。これも主に「集団・同調タイプ」の幼児であった。

その後すでに性自認した幼児たちが中核となってクラス内に「男女混合集団」、「女兒集団」あるいは「男児集団」が形成された。こうした集団に属する幼児が「女の子/男の子」という言葉や「女言葉/男言葉」などを発するようになったり、異性を排除したりするようになると、それまで性自認していなかった幼児たちが一気に性自認した。これは「集団」「中間」「個人」の中の保育者とのコミュニケーションがあった幼児、「中間」「個人」（および「集団」）の中の保育者に対して「非服従的」な幼児、および「依存的」な幼児であった。これらの幼児は主に「同性集団との同一化」あるいは「異性集団との相互補完的同一化」によって性自認をした。なお、「同性集団との同一化」をしたのは、そのときにクラスで主導権を握っていた性別に属する幼児、そして「異性集団との相互補完的同一化」をしたのは、その反対の性別に属する幼児であった。

第8章では、幼稚園3歳児クラスにおける相互行為場面に含まれる「男女間の上下関係形成過程」について検証した。その結果、①幼稚園3歳児クラスにはじめに「男女間の上下関係を含まない差異」を持ち込むのは保育者であった、②幼稚園3歳児クラスではじめに「男女間の上下関係を含む差異」を持ち出したのは幼児であった、③幼稚園3歳児クラスではじめに「男女間の上下関係を含む差異」を持ち出した幼児は、第1期から3期までに性自認した幼児であった、④その内訳を見てみると、第1期から性自認していた幼児が第2期あるいは3期に性自認した幼児を仲間にした後にはじめて「男女間の上下関係を含む差異」を持ち出していた、⑤幼児が「男女間の上下関係を含む差異」を持ち出したのはクラス内に女兒集団あるいは男児集団が形成された後であった、⑥クラス内で「男女間の上下関係を含む差異」を持ち出したのはそのクラスで支配的な性別集団に属する幼児であった。⑦保育者は第1期から第5期まではほぼ一貫してひたすら「男女間上下関係を含まない差異」を提示していた、ということが明らかになった。

第9章では、第7章における知見と第8章における知見を統合することにより、幼稚園3歳児クラスにおける性自認メカニズムと、「男女間の上下関係形成過程」の関係を明らかにした。その結果、以下のことが明らかになった。まず、幼稚園3歳児クラスに保育者が「男女間の上下関係を含まない差異」を持ち込み、全ての幼児に対して一貫して提示されていた。こうした保育者との相互行為を通して、入園時から性自認していた幼児（第1期）の他に、「性別カテゴリーとの同一化」あるいは「性別記号との同一化」によって性自認した幼児が現れた（第2期）。これらの幼児が性自認した後も、保育者による「男女間の上下関係を含まない差異」の提示は続けられ、次第に性自認した幼児が増加していった。そして、男女いずれかの同性集団がクラス内に形成されると、第1期に性自認していた幼児が、それ以降に性自認した幼児の助けを得て、他の幼児たちに「男女間の上下関係を含む差異」を提示しはじめた。このとき、それまで「男女間の上下関係を含まない差異」としてしか提示されていなかった性別カテゴリーが、「男女間の上下関係を含む差異」へと変質して用いられていた。このような状況において、それまで性自認していなかった幼児たちは仲間からの「男女間の上下関係を含む差異」の提示と保育者からの「男女間の上下関係を含まない差異」の提示という二重の圧力にさらされることになった。これを受けて「同性集団との同一化」あるいは「異性集団との相互補完的同一化」によって一斉に性自認して

いた。

以上より、本研究は、従来性自認の確立が心理学においては主に個人の発達過程として語られてきたのに対し、集団の中での相互行為によって形成されることを実証的に明らかにした。また、従来家庭内で担われてきた幼児の性自認機能が、現在は家庭外の幼稚園等の組織的集団へとシフトしてきている可能性を示唆した。